

虚空藏法について

八 田 幸 雄

一 虚空藏法関係の経軌

- (1) 『虚空藏菩薩能滿所願最勝心陀羅尼求聞持法』(『求聞持法』善無畏訳(大正二〇一六〇一))
- (2) 『大虚空藏菩薩念誦法』不空訳(大正二〇一六〇三)
- (3) 『五大虚空藏菩薩速疾大神驗秘密式経』(『式経』金剛智訳と伝えられるも後世の付加(大正二〇一六〇七))
- (4) 『金剛峯楼閣一切瑜珈瑜祇経』(『瑜祇経』金剛智訳と伝えられるも後世の編集(大正一八一二五三))
- (5) 『瑜祇経疏』安然述(七九五・八六八)(大正六一四八五)
右の経軌は宿曜関係の経軌類と関わり様々に展開している。その経軌類の主なものでは次の通りである。
- (6) 『文珠師利菩薩及諸仙所説吉凶時日善惡宿曜経』不空訳(大正二一二八七)
- (7) 『宿曜儀軌』一行撰(大正二一四二二)
- (8) 『七曜攘災決』金俱吒撰(大正二一四二六)

印度學佛教學研究第四十二卷第二号 平成六年三月

(9) 『梵天火羅九曜』一行撰(大正二一四五九)

等がある。これ等は占星術を主としたもので吉凶を示すものである。ただ七曜、九執(七曜にラゴとケートの蝕神と彗星を加えたもの)、十二宮、二十八宿、北斗七星を説く。

(1) 『求聞持法』。これは空海が修したものとして有名である。『求聞持法』には最勝心陀羅尼が説かれている。この陀羅尼は『宿曜儀軌』『式経』にも同文の真言がある。

“namo akāṣagarbhāya om ariṣa marika mauri svāha”

虚空藏菩薩のために帰命す。以下は文意未明である。天空の神秘の世界に対する呪文にみられるが、この真言の直後に「若しよく常にこの陀羅尼を誦ずものは、無始より来れる五無間等の一切の罪障悉く皆銷滅す」(大正二〇一六〇一・c)とあるから、天空の神秘に触れて清浄心を体得と解される。

次に画像法が説かれる。「宝蓮華上に半跏に坐す。…宝冠の上に五の仏像あり。跼跼趺坐す。菩薩の左手は白蓮華を執り、吠瑠璃色(vaidurya 猫目石の色)にて黄火の焰を発す。

右手はまた諸願を与うる印なり。五指垂下し掌を現わし外に向ける。これ与願の印相なり（大正二〇一六〇二・a）

修行の場所については「当に空閑寂靜の処、或いは淨室、塔廟、山頂、樹下」と説く（大正二〇一六〇二・a）。次に眞言の誦じ方は前後通計百万遍。その数は終に及び時限なしという。この他に木壇を造り修法すること。日蝕、月蝕の日に成満するように修すことが説かれている。

今『求聞持法』をみてみると、眞言文を誦ずことにより身心清淨となり、本性の宝珠を顕わにすることが出来るという。これは空海の修した求聞持の法で、それは奈良の自然智宗の体験に連なるものを持っている。宝冠に五の仏像があることは一方に金剛界五仏に發展していくものを持っている。『式経』『瑜祇経』はこの立場を示している。他方五仏は『白宝口抄』によれば日月を除いた五星（火水木金土）を示すという（大正四一七七三）。日月は陽と陰、五星は五行を示すものとして宇宙の發展を示す。これは金剛界とは別の教理で宿星信仰の立場を強調しているのである。成満の日を日蝕、月蝕の日とすることは、やがて『宿曜儀軌』のいうように「日月星皆虚空藏所変也」（大正二一四三二・b）といふ、七曜、九執、七星、二十八宿を包含し、運命、天候を支配するものとなり、請雨法と関わるものへと發展していく。

二 自然智宗へと發展する『求聞持法』

空海は『三教指帰』の序文にここに一人の沙門あり。余に虚空藏求聞持の法を呈す。その修行の効あつて「谷響きを惜しまず、明星来影す」と体験を述べている。これは宇宙の声を聞き、自らの中に宇宙の生命を感得したことを意味している。日本では空海の明星体験から『明星軌』が作られ、また明星の本地は五大虚空藏といわれるようになる。

さて虚空藏求聞持の法が奈良朝において広く行われたことは、ただ善無畏の『求聞持法』が扱ったという単純なことではない。それはこの法を受け容れる素地があつたのである。それは吉野の比蘇山寺を中心として自然智を体得する行法があつたことである。

自然智を体得するのに力あつた人は神叡、『求聞持法』を伝えた道慈、道璿である。何れも八世紀初めの人である。神叡の系譜には尊応、勝悟、護命がある。元興寺法相唯識の系譜の人である。護命は法相を学ぶとともに虚空藏法も学ぶ。

「月の上半は深山に入り虚空藏法を修し、下半は本寺にありて宗旨を研精す」とある。法相学者が一方に自己の宗教体験を深めるために山寺に入り修行したことは注目してよい。

自然智体験の修行は日本の山林修行者によって基礎が出来ていたが、これに『求聞持法』が加味され、内容が豊かにな

り、日本的瑜伽の体験が得られるようになった。この行法は比蘇山寺だけではなく、奈良の仏教の底流に広く生きていく。それは東大寺の大仏殿の尊像をみると明らかである。中央に盧遮那仏、脇士は向って左に虚空蔵菩薩で、左手と願右手施無畏である。右には如意輪観音菩薩で、左手施無畏、右手と願である。何れの尊も光線を示した光背がある。後世の像ではあるが『覚禪鈔』の求聞持虚空蔵の図像は五仏冠、右手と願左手蓮上の宝珠を示し、身体より光線を発している（大正5—12五図）。東大寺の如意輪は如意宝珠を示す尊とすれば、求聞持の法を背後に考えた尊とみられ、この場合は虚空蔵は文字通り「空」の体得を示したものとみることが出来る。

三 五大虚空蔵への展開

(1) 『求聞持法』の虚空蔵の図像は五仏冠とある。これは一方に金剛界五仏へと展開し、また一方に五星から、七曜、九執、二十八宿へと発展していく。五大虚空蔵の記述は(3)『式経』と(4)『瑜祇経』にある。

(3) 『式経』の五大虚空蔵は次のように説く。

中	解脱。	左手宝蓮華、右手施無畏	van
東	福智。	左手羯磨杵、右手施無畏	hūm
南	能滿。	左手青蓮上宝、右手宝劍	tāh
西	施願。	両手合掌	hrih

虚空蔵法について（八 田）

北 無垢。左手施無畏、右手持宝蓮華 卐
天盤の頂上に七星（北斗）（大正二〇—六〇七）王の形像を画く。地盤の内院の八方に八方天を画く。中院は二十八宿を画く。ここに注目すべきことは五大虚空蔵は van-hūm-tra-hiṇ-ah という金剛界五仏の種子が示され、密教の根本教理の金剛界と連なるとともに、北斗七星、二十八宿と関って宿曜信仰へと発展していく。

(4) 『瑜祇経』の五大虚空蔵は次のように説く。

中	白色	左手鉤	右手宝	（別名）	法界
東	黄色	左手鉤	右手宝金剛		金剛
南	青色	左手鉤	右手三弁宝		宝光
西	赤色	左手鉤	右手大紅蓮華		蓮華
北	黑色	左手鉤	右手宝羯磨		業用

（大正一八—二六三・b）（大正一八—二六三・c）

『瑜祇経』は五大虚空蔵を説く前に金剛虚空蔵五字明「van-hūm-tra-hiṇ-ah」を説く。五大虚空蔵を説いた後金剛吉祥成就一切を説く。「om vajra-sri aditya-sri soma-sri aṅgaraka-sri budha-sri bṛhaspati-sri śukara-sri śaṇiścara-sri mahāsamaye-sri svāhā」（オーム、金剛吉祥、日曜、月曜、火曜、水曜、木曜、金曜、土曜の各星曜の吉祥よ、大三昧那吉祥よ、スヴァーハー）とある。ここに五大虚空蔵は七曜と関わり、やがて『宿曜儀軌』と関わり「日月星皆虚空蔵の所

変なり」（大正二一—四三二・b）といわれるようになる。

(5)『瑜祇經疏』安然述では「虚空藏は是れ明星天子なり」（大正六一—四九六・b）といわれるようになり、「五大虚空藏は亦明星天子の本身也。故に明星円明の中に処す。亦七曜、九執、二十八宿を以って眷属となす」（大正六一—四九七・a）と。こうなると古代中国より伝承された北辰（北極星）、七星（北斗）と二十八宿の関係もみていかなければならない。

四 北辰、七星、二十八宿

北辰（北極星）は地球の自転の軸の北の中心にあるため、衆星を牽いる天の皇とされている。七星は北辰を廻り一年に三六〇度の回展をする。第七星は一ヶ月に三十度づつ位置を変え、第七番目の星と北辰との角度は一年の季節と関わる。二十八宿は天の星座であるから、万天の星は北辰に支配されるものとされる。そこで天の皇、それはすべての氣候を支配する北辰は密教ではどのように捉えられたであろうか。

(1) 妙見法

妙見は北辰の仏教的な尊格である。『阿婆縛抄』では「北辰は妙見也。又尊星王と云う是れ也」とあり続いて「尊星王は釈迦一字金輪、吉祥天也」（大正四〇—四六二・b）とある。これから北辰は尊星法とか熾盛光法へと展開していく。『図像抄』の妙見の図を見ると、妙見は雲と竜の上に乗り、上の

手に日珠と月珠を持ち、下の手に筆と記籍（ノート）を持つ。鬼と童女を伴う。向って左の脇士は雲に乗り、頭頂より六蛇を出し、四臂にして筆、記籍、刀剣、輪宝を持つ。右の脇士は雲に乗り左の手に蓮上の北斗七星を示している。

妙見の図像を見ると北斗七星が関わり季節と氣象の変化を示すとみられ、一方人の善惡の行いを記し、それが天の道に適うかを示したものとみられる。

(2) 北斗法

北辰、北斗七星を中心に九曜、十二宮、二十八宿をまとめたものに北斗曼荼羅があり、風雨順調と運命を開いていく北斗法が成立する。この曼荼羅に方形と円形の二種がある。『寛禪鈔』には釈迦文院版の方曼荼羅がある。中央内院には竜王のとり巻く山があり、その上に頂輪王（北辰、図像は釈迦金輪）が画かれ、その下に北斗七星が配され、頂輪王のまわりに九執が配されている。火水木金土の五星と、ラゴ（蝕神）、ケートツ（彗星）は星座の中を運行する星であるから命運を主る星とされている。第二院には一年の太陽の位置を示す十二宮、第三院には二十八宿が示されている。

円形では図像部七巻に仁和寺の図が示されている。四重であって、中央は大海に突き出た須弥山があり、二竜王が巻きつき、その上に頂輪王（北辰）が坐す。第二重には北斗七星と九執、第三重は十二宮、第四重は二十七宿が配される。月

は二十七日七時間で元の位置にかえるから、二十七宿と二十八宿の二通りの図がある。

以上、北辰は北斗七星、九執、二十八宿に囲まれた図を見ると、北辰の偉大な力が命運を支配し、攘災招福。風雨順時、五穀豊穰を約束する尊であることが分る。このことは神道の教理行法と関わっていく。

五 神道の教理と行法

(1) 大神神社の三輪明神

三輪明神の秘印三弁宝珠は日月星の三光表わす……昔弘法大師三輪山に参籠して八咫明神の本地供を修し玉う時、明星天子降臨したまう。……亦大己貴尊は日を現わし、月を顕わし給う故、この三光を合せて三輪の神という也」(大神神社史料五一五三七)。明星天子を妙見尊と同じように見ている。

また三輪の神は大物主と呼ばれ、その根本は宇宙の水を主るところから善女竜王といわれている。これまた妙見尊、北斗法の金輪尊、明星天子が竜王を座とするのと軌を一にしている。

長谷寺に所蔵する『三輪流神道灌頂道場法』には雨宝童子が示されている。これは求聞持法の虚空蔵菩薩の示す宝珠が発展し、雨の宝が恵まれることを示す尊となる。『雨宝童子啓白文』では「これ三界に所有の海川山峰草木石砂有情非情

の色彩の精魂……世間万物自然の本土。……明星の精霊は精雨宝童子、仏にありては虚空蔵也」(弘法大師五一二一四)、とあり宝珠の徳が展開したものとみられる。

(2) 日吉大社の山王権現

台密における北辰信仰は二つある。一つは園城寺の秘法として修せられる尊星法であり。今一つは比叡山で修せられる熾盛光法である。この尊星法も、熾盛光法も山王七社と関わっている。

山王権現が北斗七星と関わることは山王祭の行事を見ても明らかである。今日の山王祭は三月一日に牛尾宮、三宮宮の神輿が、北斗七星の降る牛尾山に運び上げられる。ここで霊気をつけ、四月十二日に山を下り東本宮に還行する。十三日に神輿は東本宮と樹下神社の神輿と合体し、神輿振りの神事が行われる。その後四基の神輿は西本宮に運ばれる。

十四日西本宮、宇佐宮、白山宮の神輿は前夜運び込まれた四基と合体し、山王七社の神輿が並ぶ。神事の後渡御が行われる。琵琶湖に向けて進んでいくが、この時に介添えをする人は黒い法被を着ている。背中には水神を示す蛇が染め抜かれている。ここには北斗七星の偉大な霊力と、大山咋の神の恵みの水が示され、山王権現は自然の大きな力であることが示されている。

(キーワード) 天文、星座の修法

(関西学院大学講師)